貴族日記にみえる平安・鎌倉時代貴族住宅の末尾語「亭」について

ON THE LAST WORD “TEI” OF HEIAN AND KAMAKURA PERIOD ARISTOCRACY RESIDENCE IN THE NOBLE DIARY

劉 羽虹^{*1}, 藤田勝也^{*2}
Yuhong LIU and Masaya FUJITA

As part of a study on the comparison and transition of architectural terms between Japan and China. The purpose of this study is to clarify the actual condition of the residence term “Tei” (亭) that can be seen in the noble diaries from Heian to the early Kamakura period in Japan. This paper based on 20 noble diaries. In order to clarify the actual condition of “Tei” (亭), it is essential to compare it with “Tei” (第).

Keywords : Noble diary, Residence terms, Tei, Tei
貴族日記, 住宅用語, 亭, 第

1. はじめに

本研究の目的は、日中間の建築用語の比較と変遷に関する研究の一環として、日本のおもに平安から鎌倉時代前半における貴族住宅の末尾語「亭」について、その実態を詳細に明らかにすることにある。

筆者らは同時期の史書をもとに、末尾語「殿」がもつ意味の変化について明らかにし^{1) 2)}、また「亭」の実態についても史書をもとに検証した^{3) 4)}。本稿はとくに後者の「亭」について、貴族日記に対象を広げることによって、その実態をより深く解き明かそうとするものである。

本稿に関連する既往研究として挙げられるのは、星陽介氏らや宮田充氏らによる報告である。

まず星氏らは、多くの貴族日記をもとに、「亭」や「第」を末尾語に用いる住宅について、居住者の階層に注目して検討している⁵⁾。具体的には「第」「亭」の記載件数の割合が示す傾向をもとに時期区分していて、第1期は10世紀初頭から11世紀中期頃、第2期は11世紀中期頃から12世紀中期頃、第3期は12世紀中期頃以降であり、第1期では末尾語「第」を多用し、また高位貴族の住宅に集中する傾向にあり、第2期には、「第」よりも「亭」を多用し、第3期には、第2期の傾向が続くとした。ただし、星氏らが取り上げた貴族日記のうち、『台記』『玉葉』『玉蘂』『岡屋関白記』については、「亭」「第」に関して詳細な分析はなく、居住者の階層性も明らかでない。星氏らが主張する「第」から「亭」への変転の時期についても再検証の必要がある。

また宮田氏はとくに『玉葉』を取り上げ、住宅名の末尾語の用法について検証結果を報告している⁶⁾。『玉葉』での末尾語「亭」は、平安初期にはそれほど広範囲に用いられず、幅広く使われるのは平安末期であるという。また同一邸でも「亭」「第」の両方を用いる事

例があることを指摘する。しかしその背景や要因には言及しない。

さて前記したとおり、筆者らは平安・鎌倉時代の貴族住宅の末尾語「亭」について、史書『百鍊抄』『吾妻鏡』をもとに分析、報告した^{3) 4)}。末尾語「亭」を用いる初期の住宅は池や泉など「水」との関連が深いこと、また12世紀後半が末尾語「第」から「亭」への転換期であることなどを推論、考察したが、その妥当性の検証には貴族日記に対象を広げることが不可欠である。そこで本稿では、星氏らが取り上げた貴族日記に加えて『水左記』『山槐記』『愚昧記』『勘仲記』そして『仙洞御移徙部類記』を新たに考察対象とした(表1)。また、末尾語「殿」がそうであったように、さらには上記の既往研究からも導かれる通り、本稿でも「第」との比較という視点から末尾語「亭」の動向を跡付けたい。

Table1 A list of historical
表 1 史料表

史料名Historical records	筆者Author	西暦A.D.	史料名Historical records	筆者Author	西暦A.D.
小右記* Shoyuki	藤原実資 FUJIWARA no Sanesuke	978-1032	山槐記 Sankaiki	中山忠親 NAKAYAMA	1151-1194
権記* Gonki	藤原行成 FUJIWARA no Yukinari	991-1011	玉葉* Gyokuyo	九条兼実 KUJO Kanazane	1164-1200
春記* Shunki	藤原貴房 FUJIWARA no Sukefusa	1038-1054	愚昧記 Gumaiki	藤原実房 FUJIWARA	1167-1189
水左記 Suisaki	源俊房 MINAMOTO no Toshifusa	1062-1108	明月記* Meigetsuki	藤原定家 FUJIWARA no Teika	1180-1235
師記* Sochiki	源経信 MINAMOTO no Tsunenobu	1065-1088	猪熊関白記* Inokuma kanoaku ki	藤原家実 FUJIWARA no	1199-1211
後二条師通記* Gonjo Moromichi ki	藤原師通 FUJIWARA no Moromichi	1083-1099	玉蘂* Gyokuzui	藤原道家 FUJIWARA no	1209-1238
中右記* Chuyuki	藤原宗忠 FUJIWARA no Munetada	1087-1138	岡屋関白記* Okanoya kanpaku ki	近衛兼経 KONOE Kanetsune	1222-1251
殿暦* Denryaku	藤原忠実 FUJIWARA no Tadazane	1098-1118	民経記* Minkeiki	藤原経光 FUJIWARA no	1226-1267
兵範記* Heihanki	平信範 TAIRA no Nobunori	1132-1171	勘仲記 Kanchuki	藤原兼仲 FUJIWARA no	1274-1300
台記* Daiki	藤原頼長 FUJIWARA no Yorinaga	1136-1155	仙洞御移徙部類記 Sentogoshiburuiki	(伏見宮旧蔵) Hushiminomiya	1022-1270

「*」は星氏らが対象とした史料

^{*1} 関西大学大学院理工学研究科 修士(文学)
^{*2} 関西大学 教授・工博

Grad. Student, Graduate School of Science and Engineering, Kansai University, M.A.
Prof., Kansai University, Dr.Eng.

2. 貴族日記にみえる「亭」と「第」の記事数の推移

本稿で対象とした貴族日記（表 1）について、邸名に末尾語「亭」「第」を用いた記事数の推移を年単位で図化した（図 1）。「第」は薄い灰色、「亭」はやや濃い灰色、同じ年に「亭」と「第」の両方が確認できる事例は黒で示した。

「亭」の初見は『小右記』正暦元年（990）10月3日条の「摂政亭」（藤原道隆邸）である。11世紀の後半以降、「亭」の記事数は増加する。『台記』『玉葉』では「亭」「第」の両方を用いる事例が多い。いっぽう『猪隈関白記』では末尾語「亭」の事例は管見では皆無である。

図 1 を俯瞰すると、左半は「第」、右半は「亭」が優勢で、1100 年前後を境に、およそ 11 世紀後半から 12 世紀前半頃が「第」から「亭」への転換期となったようにみえる。『仙洞御移徙部類記』の記事数と記事の密度は限定的かつ散在的だが、前半は「第」、後半は「亭」というおおよその傾向は看取でき、上記の傾向とほぼ整合的である。

いっぽうの「第」は全体を通して断続的に確認できるが、10 世紀中頃から 11 世紀後半にかけて多く見られる。その後は「亭」が多くを占めるものの、12 世紀中頃以降、再び増加傾向にある。

3. 10、11 世紀の「亭」「第」について

貴族日記の 10、11 世紀にみえる「第」「亭」の記事数を「里亭」「彼亭」などを除外してまとめたのが表 2 である^{注1)}。『小右記』『権記』『春記』は「第」が圧倒し、『権記』『春記』では「亭」が確認できない。逆に『帥記』『後二条師通記』『中右記』では「亭」が圧倒し、『後二条師通記』では「第」がみえない。

『小右記』（藤原実資 957-1046）の末尾語「亭」とは、前記した藤原道隆の「摂政亭」のほか、藤原道長の「左府亭」^{注2)}、藤原頼通の「関白亭」「関白書亭」「書亭」^{注3)}「六条関白旅亭」である。いずれも従一位、正二位の高位貴族の邸である。なお「六条関白旅亭」の「旅亭」は、史書の分析でみた『吾妻鏡』における「中納言法橋旅亭」の「旅亭」と同じ意とすると^{注4)}、ともに中国漢代に「亭」を

Table2 Number of “Tei” and “Tei” seen in 10th and 11th centuries

表 2 10、11 世紀にみえる「亭」「第」の記事数

史料名 Historical records	小右記 Shoyuki	権記 Gonki	春記 Shunki	水左記 Suisaki	帥記 Sochiki	後二条師通記 Gonjo Moromichi ki	中右記 Chuyuki
第/亭 Tei/Tei	158/8	33/0	20/0	6/4	3/26	0/16	2/107

「やどり」とする古い用例に通じるものである。

『小右記』における「第」の事例では、藤原道長や頼通の邸が半数以上を占める。同一邸について「亭」「第」の両方を用いる事例もある。「摂政亭」と「摂政第」、「左府亭」と「左府第」、「関白亭」と「関白第」であり、「第」は「亭」がそうであるように、従一位、正二位の高位貴族の邸である。

『権記』（藤原行成 972-1028）での「第」の事例でも、正三位までの高位貴族である。従四位下の「左近中将藤原朝臣第」が唯一の例外である。

『春記』（藤原資房 1007-1057）での「第」の事例でも、藤原頼通（従一位）の「博陸第」「高倉第」「関白第」「執柄第」、藤原教通（正二位）の「内大臣二条第」といったように高位貴族であり、藤原資頼^{注4)}の「資頼五条第」が唯一の例外である。

『水左記』（源俊房 1035-1121）の「亭」の事例についてみると、源俊房（従二位）の「六條亭」、源頼房（正二位）の「皇后宮大夫六條亭」、藤原師実（従一位）の「関白亭」のように、高位貴族の邸である。いっぽう「第」は、藤原師実（従一位）の「東三條第」「関白第」、「御所院二條第」などであり、藤原師実邸には「亭」「第」の両方を用いている。

『帥記』（源経信 1016-1097）の「第」の 3 例は、いずれも源師房（正二位）の邸である。また「亭」は、藤原俊家（正二位）の「戸部御亭」、藤原敦家（正四位下）の「敦家朝臣六條亭」、藤原実綱（正四位下）の「実綱朝臣亭」、源俊房（正二位）の「大宮大夫土御門」である。「亭」は「第」より幅広い位階で用いていることになる。

『後二条師通記』（藤原師通 1062-1099）の「亭」は、藤原師実

Fig.1 The change of number of “Tei” and “Tei” cases in noble diaries
図 1 貴族日記における「亭」「第」の記事数の推移

Table3 The cases of ‘Tei’ of “Chuyuki”
表3 『中右記』における「亭」の事例
3-1 The cases of ‘Tei’ in the 11th century (11 世紀)

住宅名 Name of Residence	人物 figures	位階ikai
右府六条亭Ufu rokujo Tei、六条亭Rokujo Tei、右府土御門亭Ufu tsuchimikado Tei、右大將六条亭Udaisho rokujo Tei、右將軍六条亭Ushogun rokujo Tei、右大臣亭Udaijin Tei、右大臣六条亭Udaijin rokujo Tei	源頼房MINAMOTO no Akifusa	正二位 Shonii
東二条亭Higashisanjo、二条亭Nijo Tei、内府二条亭Naifu nijo Tei、内大臣殿二條亭Naidaijindono nijo Tei、左大將御所二条亭Sadaishogosho nijo Tei、関白亭Kanpaku Tei	藤原師通FUJIWARA no Moromichi	正二位 Shonii
関白二条亭Kanpaku nijo Tei、新造九条亭Shinzo kujo Tei	藤原師通FUJIWARA no Moromichi	従一位Juichii
左府亭Safu Tei、土御門亭Tsuchimikado Tei、左大臣土御門亭Sadaijin tsuchimikado Tei、左府土御門亭Safu tsuchimikado	源俊房MINAMOTO no Toshifusa	正二位Shonii
左府亭Safu Tei	源俊房MINAMOTO no Toshifusa	従一位Juichii
土御門亭Tsuchimikado Tei	藤原宗俊FUJIWARA no Munetoshi	正二位Shonii
九条前太相国亭Kujo sakinodaishokoku Tei	藤原信長FUJIWARA no Nobunaga	従一位Juichii
二条烏丸故関白旧亭Nijokarasuma kokanpaku kyutei	藤原教通FUJIWARA no Norimichi	従一位Juichii
関白殿六条亭Kanpakudono rokujo Tei、関白亭Kanpaku Tei	藤原師実FUJIWARA no Morozane	従一位Juichii
太后御所六条坊門亭Taiko gosho rokujobomon Tei	太后Taiko	
新造高松亭Shinzo takamatsu Tei、高松亭Takamatsu Tei	藤原頼季FUJIWARA no Akisue	正四位下Shoshiinoge
頼綱朝臣六条亭Yorituna ason rokujo Tei	源頼綱MINAMOTO no Yorituna	従四位下Jushinoge
修理大夫俊綱朝臣臥見亭Shuri no daibu toshitsuna ason husimi Tei	橘俊綱TACHIBANA no Toshitsuna	正四位上Shoshiinojo
八条亭Hachijo Tei	藤原宗通FUJIWARA no Munemichi	正四位下Shoshiinoge
右大將土御門亭Udaisho tsuchimikado Tei、右大將亭Udaisho Tei	源雅実MINAMOTO no Masazane	正二位Shonii
帥大納言亭Sochi dainagon Tei	源経信MINAMOTO no Tsunenobu	正二位Shonii
上卿新中納言亭Shokei sinchunagon Tei、新中納言亭Sinchunagon Tei	藤原通俊FUJIWARA no Michitoshi	正三位Shosanmi
治部卿亭Jibukyo Tei	藤原通俊FUJIWARA no Michitoshi	従二位Junii
木工権頭季実朝臣土御門東洞院亭Moku no gonnokami suezeaneason tsuchimikado higashitouin Tei	藤原季実FUJIWARA no Suezane	従四位上Jushiinojo
江中納言亭Gochunagon Tei	大江匡房OE no Masafusa	従二位Junii
右兵衛督亭Uhyoe no kami Tei	源雅俊MINAMOTO no Masatoshi	従三位Jusanmi
源中納言亭Genchunagon Tei	源俊実MINOMOTO no Toshisane	従二位Junii
因幡内侍里亭Inabanaishi ritei	藤原惟子FUJIWARA Iko	
和泉守右信宅五条亭Izuminokami arinobutaku gojo Tei	藤原有信FUJIWARA no Arinobu	従五位下Jugoinoge

3-2 The cases of ‘Tei’ in the 12th century (12 世紀)

内大臣亭Udaijin Tei、内府亭Naifu Tei、内大臣土御門亭Naidaijin tsuchimikado Tei、左大將亭Sadaisho Tei、近衛高倉亭Konoe karakura Tei、御所内府土御門亭Goshonaifu tsuchimikado Tei、土御門内大臣亭Tsuchimikado naidaijin Tei	源雅実MINAMOTO no Masazane	正二位Shonii
民部亭Minbu Tei、民部卿亭Minbukyo Tei	源俊明MINAMOTO no Toshiaki	正二位Shonii
左府亭Safu Tei、左府里亭Safu ritei、左大臣亭Sadaijin Tei、左大臣堀川亭Sadaijin horikawa Tei	源俊房MINAMOTO no Toshifusa	従一位Juichii
大宮権大夫亭Omiya no daibu Tei	藤原季仲FUJIWARA no Suenaga	従二位Junii
江中納言二条亭Gochunagon nijo Tei	大江匡房OE no Masafusa	正二位Shonii
上皇御所高松亭Jokogosho takamatsu Tei、法王御所高松亭Hoogosho takamatsu Tei、院御所土御門亭Ingosho tsuchimikado Tei、土御門亭Tsuchimikado Tei、法皇御所土御門亭Hoogosho tsuchimikado Tei、大炊門万里小路亭中御門亭Nakamikado Tei、新造中御門亭Sinzo nakamikado Tei	上皇御所Jokogosho	
故為章朝臣二条亭Kotameaki ason nijo Tei	藤原忠宗FUJIWARA no Tadamune	正三位Shosanmi
為房朝臣九条亭Tamefusa ason kujo Tei	高階為章TAKASINA no Tameaki	正四位下Shoshiinoge
右衛門督六条亭Uemon no kami rokujo Tei、右衛門督宗通卿五節出立所東洞院亭Uemon no kami munemichikyo	藤原為房FUJIWARA no Tamefusa	正四位下Shoshiinoge
gosechidedachio higashitoin Tei、右衛門督亭Uemon no kami Tei、右大將花山院亭Udaisho kazarin Tei、右大將土御門亭Udaisho tsuchimikado Tei、右大將亭Udaisho Tei	藤原宗通FUJIWARA no Munemichi	正二位Shonii
春宮大夫亭Togu no daibu Tei、春宮大夫三条亭Togu no daibu sanjo Tei	藤原家忠FUJIWARA no Ietada	正二位Shonii
三条富小路亭Sanjo tominokoji Tei	藤原公実FUJIWARA no Kinzane	正二位Shonii
五条烏丸地相博頼仲入道中御門亭Gojo karasumachi sohaku yorinaka nyudo nakamikado Tei	藤原盛実FUJIWARA no Morizane	正四位下Shoshiinoge
有佐朝臣三条亭Arisuke ason sanjo Tei	源頼仲MINAMOTO no Yorinaka	従五位下Jugoinoge
前斎院御所二条堀川亭Sakinosalin nijo horikawa Tei、前斎院二条亭Sakinosalin nijo Tei、御所堀川二条亭Gosho horikawanijo Tei、前斎院御所中御門亭Sakinosalin gosho nakanomikado Tei	藤原有佐FUJIWARA no Arisuke	従五位下Jugoinoge
四郎大夫宗重亭Shirodayu muneshige Tei	令子内親王Reishi naishinnou	
関白亭Kanpaku Tei	藤原宗重FUJIWARA no Muneshige	従五位下Jugoinoge
源中納言亭Genchunagon Tei	藤原忠実FUJIWARA no Tadzane	正二位Shonii
東宮御所土御門亭Togugosho tsuchimikado Tei	源俊実MINOMOTO no Toshisane	従二位Junii
左大弁中御門亭Sadaiben nakanomikado Tei、左大弁亭Sadaiben Tei	東宮御所Togugosho	
修理大夫六条亭Shuri no daibu rokujo Tei	源重資MINAMOTO no Sinasuge	正四位上Shoshiinojo
法橋成信五条富小路亭Houkyo narinobu gojo tominokoji Tei	藤原頼季FUJIWARA no Akisue	従三位Jusanmi
皇居内大臣土御門亭Koukyo naidaijin tsuchimikado Tei	法橋成信HOUKYOU Narinobu	僧Buddhist
京御所三条烏丸亭Kyogosho sanjo karasuma Tei	皇居Koukyo/源雅実MINAMOTO no Masazane	
	御所Gosho	

（従一位）の「堀河亭」、藤原実季（正二位）の「七条亭」そして、記主師通の自邸「二条亭」であり、「二条亭」が記事数 13 を数え、もっとも多い。

『中右記』（藤原忠宗 1087-1133）における末尾語「亭」の記事数は 252、「第」は 7 である。それらについて、居住者不明の場合は除外し、また同一人で同一邸は事例数 1 とみなして年次順にまとめた（11 世紀は表 3-1、12 世紀は表 3-2）⁷⁾。表中に太線で区切ったのは同一人で位階が異なる場合である。

『中右記』の 11 世紀における「亭」の記事数は 107、「第」は 2 であり、「亭」を多用している。居住者の位階についてみると、「亭」は従一位から従五位下まで幅広い（表 3-1）。いっぽう「第」は、藤原行家（正四位下）の「行家朝臣七条第」および、藤原家忠（正二位）の「権大納言近衛第」である。

以上、10、11 世紀に「亭」は少なく「第」を多用する、という星氏らの主張をあらためて確認した。また「第」は高位貴族に用いると星氏らはされたが、しかし『小右記』によれば「亭」でもそれは該当した。また 11 世紀中頃より「亭」を多用するというのは星氏らの指摘の通りである。ただし用いる階層は「第」と同様に広範囲で

あった。さらに特徴的なのは、『後二条師通記』で記主師通の自邸に「亭」を多用していることである（「二条亭」）。これは末尾語としての「亭」の謙譲表現としての性格を示唆する。

なお、史書による検証では、末尾語「亭」は、当初、池や泉など「水」の存在でよく知られる邸に用いた可能性があるとした^{8) 4)}。はたして「亭」の早い事例である『小右記』における道隆の「摂政亭」もまた、南池の存在が知られているし⁸⁾、ほかにも末尾語「亭」の住宅で「水」の存在する事例は複数確認できる^{注5)}。しかし史料制約による不明の事例も少なからずあり、史書はもとより貴族日記からも、可能性の域を出るものではない。

4. 12 世紀の「亭」「第」について

貴族日記の 12 世紀にみえる「第」「亭」の記事数について、「里亭」「彼亭」などを除外してまとめたのが表 4 である。『台記』『玉葉』以外は「亭」が大勢を占める。

『中右記』の 12 世紀における「亭」の記事数は 145、対して「第」はわずか 5 である。居住者の位階に注目すると、「亭」は従一位から従五位下まで幅広く（表 3-2）、女院、前斎院、上皇の御所などもあ

Table4 Number of “Tei” and “Tei” seen in 12th centuries

表 4 12 世紀にみえる「亭」「第」の記事数

史料名 Historical records	中右記 Chuyuki	殿暦 Denryaku	兵範記 Heihanki	台記 Daiki	山槐記 Sankaiki	玉葉 Gyokuyo	愚昧記 Gumaiki
第/亭 Tei/Tei	5/145	1/80	0/153	88/42	3/166	115/174	0/63

る。いっぽう「第」について居住者が判明するのは、藤原忠通（従一位）の「近衛第」、「皇居六条第」、「皇居士御門烏丸第」、「皇居士御門第」そして上皇御所の「三条烏丸第」である。また鳥羽上皇の三条邸については、末尾語「亭」「第」の両方を用いている^{注6)}。

前節の『後二条師通記』がそうであったように、『中右記』でも記主忠宗の自邸が「中御門亭」というように末尾語「亭」を用いていて、しかも記事数 40 と多い。

『殿暦』（藤原忠実 1078-1162）では「亭」が 80 に対して、「第」は 1 のみである。「亭」の位階に注目すると、従一位から正四位下まで幅広く^{注7)}、女院の御所「中宮三条亭」「皇后宮二条亭」、上皇の御所「高松亭」「六条亭」「院御所大炊御門亭」「高陽院亭」などもある。

「第」は源雅実（正二位）の「内大臣大饗第」である。

また『殿暦』でも記主忠実の自邸三条邸について記す場合はすべて（記事数 8）、「三条亭」のように「亭」を用いている。

『兵範記』（平信範 1112-1187）は「亭」を用い、「第」は管見に見えない。「亭」は従一位から正四位下まで幅広く^{注8)}、また女院藤原得子の邸が「八条東洞院泉亭」である。

『台記』（藤原頼長 1120-1156）でも「亭」が多いが、「第」が希少というわけではない。ただし前半は「亭」を多用し、後半は「第」が増える傾向にある。

「亭」は、源有仁（従一位）の「左相府亭」、藤原忠通（従一位）の「摂政亭」「執柄亭」「摂政近衛亭」「近衛亭」、藤原公教（正二位）の「左金吾亭」、藤原頼長（従一位）の「左府亭」、源雅定（正二位）の「左大将亭」「右大臣亭」など、従一位、正二位の高位貴族の邸である。いっぽう末尾語「第」は、従一位から従五位上まで幅広く^{注9)}、また上皇御所の「中院第」「新造高松第」や仮皇居の「四條東洞院第」、官子内親王の「前齋院東洞院第」、女院御所の「高陽院土御門東洞院第」「三條第」「三條西洞院第」「土御門第」などがある。また藤原忠通や源雅定の邸では「亭」「第」の両方を用いている^{注10)}。

さらに、頼長の自邸についてみると、「大炊第」「大炊亭」「大炊御門第」「大炊御門亭」といったように、『後二条師通記』や『中右記』とは異なり、「亭」とともに「第」も用いている。

星氏らは、『台記』における記主頼長の邸について、平安時代の中・後期（約 1150 年以降）にかけて「大炊御門亭」から「大炊第」のように「亭」から「第」へと変化したと主張する⁹⁾。しかし、管見では 12 世紀後半に「大炊亭」は記事数 6、「大炊第」は記事数 7 を確認していて、「亭」「第」を併用していたのが実状である。

『山槐記』（中山忠親 1131-1195）は「亭」が 166 と大半を占め、「第」は 3 のみである。

「亭」について、居住者不明の事例は除外し、また同一人の同一邸は事例数 1 とみなして年次順にまとめたのが表 5 である⁷⁾。事例数では 73 となるが、居住者の位階に注目すると、従一位から正五位下まで幅広く、以仁王の邸もある。また表 5 を通覧すると、平清盛および清盛に関わる人物の邸が目立つ^{注11)}。これは史書『百鍊抄』

Table5 The cases of ‘Tei’ in “Sankaiki”

表 5 『山槐記』における「亭」の事例

和暦 Japanese Calendar	西暦 A.D.	住宅名 Name of Residence	人物 figures	位階 Ranks
仁平2年2月9日	1152	Udaaiin Tei 左府亭	源雅実 MINAMOTO no	正二位 Shonji
仁平2年2月9日	1152	Safu Tei 右大臣官亭	藤原伊通 FUJIWARA no Yorinao	従一位 Juichiji
仁平2年3月13日	1152	Omiva dainaoon Tei 三條亭	藤原伊通 FUJIWARA no Koremichi	正五位下 Shonji
仁平2年9月15日	1152	Sanio Tei 内府亭	源原実定 NAKAYAMA Tadachika	正二位 Shoninnooe
仁平2年9月19日	1152	Naifu Tei 一条基小路亭	藤原公教 FUJIWARA no	正四位下 Shonji
久寿2年6月1日	1155	Ichio tomikoti Tei 右侍兼亭	藤原公教 TOKUDAIJI Kinchika	正二位 Shoshinooe
保元4年正月30日	1159	Uchouon Tei 三條高倉亭	藤原公教 FUJIWARA no Kinvoshi	正二位 Shonji
永暦1年7月9日	1160	Sanio takakura Tei 執柄亭	藤原公教 FUJIWARA no Kinnori	正二位 Shonji
永暦1年10月11日	1160	Shioe Tei 入道大相国八條亭	藤原公教 FUJIWARA no Motozane	正一位 Shonji
永暦1年11月15日	1160	Nvudo taishokoku hachio Tei 右大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Sanevuki	正一位 Juichiji
永暦1年12月4日	1160	Udaaiin Tei 入道前大政大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Kinnori	正一位 Shonji
永暦1年12月4日	1160	Nvudo sakino daiiodaiiin Tei 太政大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Kinvoshi	正一位 Juichiji
永暦1年12月4日	1160	Daiio daiiin Tei 大炊御門北高倉亭	藤原公教 FUJIWARA no Koremichi	正一位 Shonji
応保1年8月11日	1161	Qimikadokita takakura hioashi Tei 藤大納言亭	藤原公教 FUJIWARA no Kinvoshi	正一位 Shonji
応保1年9月11日	1161	Fuui dainaoon Tei 内府亭	藤原公教 FUJIWARA no Kinvoshi	正一位 Shonji
応保1年11月18日	1161	Naifu Tei 入道大相国亭	藤原公教 FUJIWARA no	正一位 Shonji
応保1年11月19日	1161	Nvudo taishokoku Tei 入道右大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Sanevuki	正一位 Juichiji
応保1年11月19日	1161	Nvudo udaaiin Tei 内大臣亭	藤原公教 MINAMOTO no	正一位 Shonji
応保1年11月19日	1161	Naiiin Tei 摂政亭	藤原公教 FUJIWARA no	正一位 Shonji
永万2年7月27日	1166	Sessho Tei 内府亭	藤原公教 FUJIWARA no Motofusa	正一位 Shonji
仁安2年2月2日	1167	Kiue Tei 大相国亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Shonji
仁安2年2月11日	1167	Daishokoku Tei 別当亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Shonji
仁安2年2月14日	1167	Betto Tei 右大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Takasue	正一位 Shosanmi
仁安2年4月14日	1167	Sadaiiin Tei 九條亭	藤原公教 FUJIWARA no	正一位 Shonji
仁安2年4月27日	1167	Kiue Tei 中宮大夫人亭	藤原公教 FUJIWARA no Moronao	正一位 Shonji
安元1年8月16日	1175	chuou daibu Tei 土御門亭	藤原公教 FUJIWARA no Takasue	正一位 Shonji
安元1年8月20日	1175	Tsuchimikado Tei 入道大相国氏平兼亭	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承2年正月20日	1178	Nvudo daishokoku settu hukuware Tei 七條坊城亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承2年6月27日	1178	Nanao boio Tei 右大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Mitsutaka	正一位 Shonji
治承2年6月28日	1178	Udaisho Tei 六波羅亭（入道大相国亭）	藤原公教 TAIRA no Munemori	正一位 Shonji
治承2年閏6月27日	1178	Rokuhara Tei/Nvudo daishokoku Tei 右門前親衛卿之亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承3年正月6日	1179	Uemonnokami vorimori no Tei 小松亭	藤原公教 TAIRA no Yorimori	正一位 Shosanmi
治承3年正月22日	1179	Komatsu Tei 大膳亭	藤原公教 FUJIWARA no Motomichi	正一位 Shonji
治承3年正月22日	1179	Dairi Tei 左大将亭	藤原公教 TAIRA no Tokitada	正一位 Junii
治承3年2月2日	1179	Sadaisho Tei 一条行忠	藤原公教 FUJIWARA no Sanesada	正一位 Shonji
治承3年2月24日	1179	Ichio nmi kawachinononkami yukitada Tei 八條禪門亭	藤原公教 ICHUO Yukitada	正一位 Junioino
治承3年3月18日	1179	Hachio zenmon Tei 土御門大納言亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承3年3月26日	1179	Tsuchimikado dainaoon Tei 冷泉室町西亭	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承3年4月9日	1179	Reizei muromachi Tei 入道大相国氏平兼亭	藤原公教 MINAMOTO no Arifusa	正一位 Shoshinooe
治承3年4月23日	1179	Nvudo daishokoku hachio Tei 藤隆亭	藤原公教 FUJIWARA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承3年4月25日	1179	Hakuriku Tei 藤原親定	藤原公教 FUJIWARA no Motofusa	正一位 Juichiji
治承3年5月24日	1179	Safu Tei 五條亭	藤原公教 FUJIWARA no	正一位 Juichiji
治承3年6月12日	1179	Goio Tei 藤原基通	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承3年6月20日	1179	Rokuio sessho Tei 八條亭	藤原公教 FUJIWARA no Motofusa	正一位 Juichiji
治承3年11月14日	1179	Hachio Tei 入道大相国氏平兼亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承3年11月16日	1179	Unii chusho Tei 近衛北室町東亭	藤原公教 FUJIWARA no Motomichi	正一位 Junii
治承3年11月26日	1179	Konoe kita muromachi hioashi Tei 近衛北室町西亭	藤原公教 FUJIWARA no Motomichi	正一位 Junii
治承3年12月13日	1179	Kanoaku Tei 入道太政大臣八條亭	藤原公教 FUJIWARA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承3年12月16日	1179	Nvudo daiiodaiiin hachio Tei 右大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Kanezane	正一位 Juichiji
治承4年2月21日	1180	Udaaiin Tei 大納言邦綱卿亭	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承4年3月4日	1180	Dainagon kunituna Tei 藤原基通	藤原公教 FUJIWARA no Motomichi	正一位 Shonji
治承4年3月16日	1180	Sessho Tei 八條二品（入道大相国室）亭	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承4年3月19日	1180	Hachio nihin Tei 八條坊門南烏丸西亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承4年3月22日	1180	Settzu hukuware Tei/Zenmon Tei 六波羅入道相国泉亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承4年3月22日	1180	Rokuhara nvudo shokoku Sentei 八條坊門南烏丸二品亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承4年4月6日	1180	Hachio bomon kushioe nihin Tei 八条堀町二品亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承4年4月27日	1180	Hachio kushioe nihin Tei 八條坊門南烏丸西亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承4年5月14日	1180	Hachio bomon minami karasuma nishi Tei 三條北高倉西亭	藤原公教 FUJIWARA no Suevoshi	正一位 Shoshinooe
治承4年5月15日	1180	Sanio kita takakura nishi Tei 前右大將（宗盛）亭	藤原公教 Mochihitoou	正一位 Shonji
治承4年5月26日	1180	Sakino udaisho Tei 福原亭	藤原公教 TAIRA no Munemori	正一位 Shonji
治承4年5月30日	1180	Fukuhara Tei 四條大高亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承4年11月10日	1180	Shio omi Tei 土御門大納言亭（福原新造亭）	藤原公教 FUJIWARA no Takasue	正一位 Shonji
治承4年11月20日	1180	Tsuchimikado dainaoon Tei/Fukuhara sinzo Tei 寺江亭	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承4年11月20日	1180	Terse Tei 五條東洞院亭	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承4年11月26日	1180	Goio hioashitoun Tei 六波羅入道大相国亭	藤原公教 FUJIWARA no Kunituna	正一位 Shonji
治承4年11月26日	1180	Rokuhara nvudo daishokoku Tei 八條堀町亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
治承4年12月14日	1180	Hachio kushioe Tei 近衛室町亭	藤原公教 TAIRA no Kivomori	正一位 Juichiji
元暦1年8月20日	1184	Konoe muromachi Tei 五條亭	藤原公教 FUJIWARA no Motomichi	正一位 Shonji
元暦1年8月24日	1184	Goio Tei 五條摂政亭	藤原公教 FUJIWARA no Tsunefusa	正一位 Jusanmi
元暦2年7月9日	1185	Goio sessho Tei 右大臣亭	藤原公教 FUJIWARA no Kanezane	正一位 Juichiji
元暦2年7月22日	1185	Sadaiiin Tei 中山亭	藤原公教 FUJIWARA no	正一位 Juichiji
文治1年8月19日	1185	Chuzan Tei 右大臣亭	藤原公教 NAKAYAMA Tadachika	正一位 Shonji
文治5年11月13日	1189	Sadaiiin Tei	藤原公教 FUJIWARA no Sanesada	正一位 Shonji

の分析でも指摘した点である^{注12)}。

いっぽう「第」は藤原宗能（正二位）の「内府第」、藤原邦綱（正二位）の「土御門第」である。

また『山槐記』の記主中山忠親の自邸については、「三条亭」「中山亭」といったように、「第」ではなく「亭」を用いている。

『玉葉』（九條兼実 1149-1207）での「亭」の記事数は174、「第」は115であり、「亭」の方が多いが、「第」も一定程度あって希少というわけではない。

末尾語「亭」の事例は、従一位から従四位上まであり^{注13)}、暲子内親王の「八條東洞院亭」や女院藤原殖子の「三條鳥丸亭」といった事例がある。いっぽう「第」もまた従一位から従五位下まで幅広く^{注14)}、また、皇居や東宮御所、親王邸にも用いられている。そして同一邸に「亭」「第」の両方を用いる事例もある^{注15)}。

『玉葉』を分析した宮田氏は⁶⁾、当初は「第」を多用するが、やがて「第」は減り、かわって「亭」が増えるという、「第」から「亭」への変転を主張する。ただし図1の『玉葉』の欄に示される通り、変転の途中には両者併用の時期が見いだせる。

また、兼実の自邸についてみると、記事数で「九條亭」17、「九條第」4であり、また冷泉北万里小路西や大炊御門北富小路西の邸についても「冷泉亭」「大炊御門亭」といったように、「第」（あるいは「家」）も無いことはないが、「第」よりも「亭」を多用する傾向にあったことがわかる。

『愚昧記』（藤原実房 1147-1125）では、「亭」を用い「第」は見えない。そして多くは従一位から従四位上までの貴族邸である^{注16)}。

『明月記』（藤原定家 1162-1241）の12世紀は、「亭」が記事数9、「第」は2である。「亭」は従一位、正二位の貴族邸^{注17)}のほか、平清盛の妻時子の「八条坊門匣亭」がある。いっぽう「第」は、平頼盛（正三位）の邸が「八条室町頼盛卿第」である。

星氏らは『中右記』『殿暦』『兵範記』をもとに、11世紀中頃から12世紀中頃に「第」から「亭」へと代わると主張する。本稿で取り上げた『山槐記』『愚昧記』もその主張にほぼ整合的である。しかしさらに本稿で取り上げた『台記』『玉葉』では、いささか様相が異なる。『台記』では「第」を「亭」とともに用い、両者の区別はあいまいであり、『玉葉』では日記それ自体に「第」から「亭」への変転がある。

また『中右記』『殿暦』『山槐記』そして『玉葉』では、記主の自邸に「亭」を多用したことが注目される。前三者は記事数で「亭」が「第」を圧倒するので、「亭」を用いることと、それが自邸であることの関係性は不明確である。しかし「第」を一定程度用い、「亭」と「第」の区別があいまいにみえる『玉葉』において、自邸に「亭」が多いのは示唆的である。

5. 13世紀の「亭」「第」について

貴族日記の13世紀にみえる「第」「亭」の記事数について、「里亭」「彼亭」などを除外してまとめたのが表6である。

『明月記』の13世紀は「亭」を多用する。「亭」の事例は従一位、正二位、従二位の高位貴族の邸で^{注18)}。上皇や女院の御所もある。正四位下の藤原親能の「大宮亭」が唯一の例外である。

「第」もまた、藤原道家（正二位）の「執柄第」、近衛兼経（正二位）の「近衛二品新第」で、高位貴族である。

Table6 Number of “Tei” and “Tei” seen in 13th centuries

表6 13世紀にみえる「亭」「第」の記事数

史料名	明月記	猪隈関白記	玉葉	岡屋関白記	民経記	勘仲記
Historical records	Meigetsuki	Inokuma kanoaku ki	Gyokuzui	Okanoya kanpaku ki	Minkeiki	Kanchuki
第/亭	6/124	93/0	20/41	26/14	27/166	129/8
Tei/Tei						

『猪隈関白記』（藤原家実 1179-1243）は「第」を用い、管見に「亭」は皆無である。末尾語「第」の事例は皇居や院御所、皇親の御所^{注19)}や、従一位、正二位の高位貴族邸である^{注20)}。他の日記では「亭」を用いてもよいと考えられる邸でも、『猪隈関白記』では「第」である。たとえば、ほぼ時期を同じくする『明月記』では藤原頼実の邸を「前太相国大炊御門亭」とするが、『猪隈関白記』では「前太相国大炊御門第」である^{注21)}。

『玉葉』（藤原道家 1193-1252）では「亭」が多いが、「第」も用いている。「亭」の事例は従一位から正四位下まで^{注22)}、「第」は従三位までであり^{注23)}、「亭」は「第」よりやや幅広い階層ともいえる。しかし両方を用いる場合もあり^{注24)}、その差異は判然としない。

『岡屋関白記』（近衛兼経 1210-1259）でも「亭」が「第」より多い。「亭」の事例は、従三位以上の高位貴族邸^{注25)}、「第」もまた従一位、正二位、従二位の高位貴族邸^{注26)}や、皇居・親王邸である。「亭」が「第」より広範ともいえるが両者に大差はない。はたして同一邸に「亭」「第」両方の事例がみられる^{注27)}。

『民経記』（広橋経光 1213-1274）では「亭」が「第」を圧倒する。「亭」の事例は、従一位から従四位下までの貴族邸で^{注28)}、右馬允（七位相当）藤原宣俊の邸の「青侍亭」は唯一の例外である。ほかに僧官の「綱所来弁亭」、中宮九条嬪子の「中宮一条室町亭」「一条室町亭」、女院平棟子の「女房一品亭」がある。いっぽう「第」は従一位から正五位上の貴族邸であり^{注29)}、「亭」との区別はあいまいである。はたして同一邸に「亭」「第」の両方を用いる事例がある^{注30)}。

『勘仲記』（広橋兼仲 1244-1308）では「第」が「亭」を圧倒する。「第」の事例は従一位から従六位上まで幅広く^{注31)}、女院西園寺姞子の「常葉井第」、女院勘解由小路経子の「歓喜光院内侍殿第」がある。いっぽう「亭」は皇居や貴族邸である^{注32)}。「第」は「亭」より広範囲ともいえるが、「亭」は記事数8と少なく、「亭」と「第」の区別はあいまいである。ここでも「亭」「第」の両方を用いる事例があるが、管見では吉田経長の「吉田亭」「吉田第」、西園寺実兼の「春宮大夫亭」「春宮大夫第」の2例のみである。

星氏らは、「亭」を多用する傾向は12世紀中頃以降も継続すると主張する⁵⁾。しかし、本節で通覧した13世紀の様相は、この主張に否定的である。「亭」「第」のいずれかが支配的になるというわけではなく、両方が用いているというのが実態に近い。

また個別に日記を見ると、『猪隈関白記』『勘仲記』は「第」、『明月記』『民経記』は「亭」である。「亭」か「第」のいずれを用いるかは、記主の個性による面もあるかもしれない。「亭」が支配的な『民経記』において、その晩年近くに限って「第」が頻出するのは、あるいはこの仮説を裏打ちするものであろう。

6. おわりに

以上、貴族日記に記される住宅名の末尾語「亭」について、「第」と比較しつつ検証した。検証結果の概要を以下にまとめる。

- ① 10、11 世紀に「亭」は少なく「第」を多用する、という星氏らの主張を再確認した。また「第」は高位貴族の邸に用いるとされたが、『小右記』によれば「亭」でもそれは該当した。
- ② 11 世紀中頃より「亭」を多用する、というのも星氏らの主張であったが、本稿でもそれを確認した。本稿では加えて、「亭」の事例をみると、「第」と同様に居住者の位階は広範囲であった。
- ③ 1100 年前後、すなわち 11 世紀後半から 12 世紀前半頃が、末尾語「第」から「亭」への転換期で、それ以降は、「亭」を「第」より多用した。
- ④ 12 世紀は「亭」が支配的にになるとされていたが、『台記』『玉葉』では「第」も用いていて、日記によってその傾向には濃淡があった。
- ⑤ 13 世紀は「亭」「第」のいずれかが優勢というわけではなく、両方を同じように用いた。
- ⑥ 『後二条師通記』『中右記』『殿暦』『山槐記』『玉葉』では、記主の自邸には「第」よりも「亭」を多く用いるか、「亭」のみを用いた。とくに「亭」を選択的に用いたと考えられるのは、『玉葉』であった。

史書をもとにした筆者らの分析では、12 世紀後半が「第」から「亭」への転換期であるとみなされた^{3) 4)}。しかし日記を対象にした本稿の分析では、それより半世紀から 1 世紀早い、11 世紀後半から 12 世紀前半頃がその時期であった (③)。また史書では、当初の「亭」は、池・泉など「水」の存在で知られる邸に用いる可能性があったが、とくに 12 世紀後半以降に両者の関係は見出し難いと推論した。これについては本稿でも判然とはしなかったが、12 世紀以降については、「亭」「第」の両方を用いていることや、園池の不在で知られる邸を末尾語「亭」とする事例もあることから^{注 33)}、「亭」と「水」との関係を見いだすことはもはやできない、と考えて差し支えないだろう。

13 世紀以降は「亭」「第」ともに用いたとはいえ (⑤)、しかし 11 世紀から 12 世紀にかけて、1100 年頃を境に「亭」を多用する傾向にあったのはなぜだろう。

これに答えるのは容易ではないが、想起されるのは屋敷規模の縮小化という時代の潮流である。東三条第や閑院など方一町を超える大規模な邸宅が存在した一方で、摂関家をはじめとする上級貴族の邸でさえ、院政がはじまるこのころより、屋敷の規模は縮小化の傾向にあったとされる^{注 34)}。末尾語「亭」の多用化とあるいは関連するのではなからうか。もとより「亭」とは、あずまやであり、池のほとりの建物の意でもある^{注 35)}。要は、大規模な建物を決して指さないのである。そしてそれは自邸には「第」よりも「亭」を用いる日記にうかがえる、記主の心性とも繋がるように考えられる。

末尾語と屋敷規模との間に関連性がある、とまではいえないにせよ、末尾語の背景に屋敷規模の変容がもしあるなら、「亭」や「第」といった 1 文字に過ぎないとはいえ、貴族日記にあらわれるその動向が、かれらの住まいの、この時期の趨勢を表徴していることにもなる。

史書の分析では、『百鍊抄』の 12 世紀後半以降に「亭」が頻出し、この時期からはじまる『吾妻鏡』では「第」ではなく「亭」を多用していたことを明らかにした^{3) 4)}。とくに後者について、鎌倉幕府

による編纂で、武家政権を中心に記すという、『吾妻鏡』の史書としての性格を反映したものではないかと推論したが、屋敷規模の縮小化がその背景にあり、とりわけ鎌倉や京都における武家屋敷の登場がこれに関わることも想定される。いずれにせよ推論の域を出るものではなく、実態の解明は今後の課題である。

それにしても全体として末尾語の主流は「第」から「亭」へと入れ替わり、「亭」を多用する時期を経た 13 世紀に、『猪隈閑白記』が「第」に固執し「亭」を一切用いない、というのは奇異にもみえる。『勘仲記』もまた同じである。記主の個性、書き癖といってしまうとそれまでなのかもしれないが、住宅呼称の末尾語をめぐるのは、日記ごとのより詳細な分析と、一方で時代の範囲を広げつつ、さらに検証を進める必要があろう。

本稿は、2020 年度関西大学大学院理工学研究科高度化推進研究費による研究成果の一部を含む。

参考文献

- 1) Liu, Y.: On the meaning change of the last word “Den” of Heian and kamakura period aristocracy residence, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 84 No. 765, pp. 2407-2415, 2019. 11 (in Japanese)
劉羽虹：平安・鎌倉時代貴族住宅の末尾語「殿」の意味変化について，日本建築学会計画系論文集，第 84 巻，765 号，pp. 2407-2415, 2019. 11
- 2) Liu, Y. Fujita, M.: On the Semantic Changes of the last word “Den” in the History books of Heian and Kamakura period, Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol. 59, pp. 441-444, 2019 (in Japanese)
劉羽虹・藤田勝也：平安・鎌倉時代の史書にみる末尾語「殿」の意味変化について，日本建築学会近畿支部研究報告集，第 59 号・計画系，pp. 441-444, 2019. 5
- 3) Liu, Y. Fujita, M.: A research on the term of residences “Tei” between the Japan and china: Comparison with “Tei”, Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol. 60, pp. 461-464, 2020 (in Japanese)
劉羽虹・藤田勝也：日中における住宅用語「亭」に関する研究—「第」との比較を通して—，日本建築学会近畿支部研究報告集，第 60 号・計画系，pp. 461-464, 2020. 5
- 4) Liu, Y.: On the last word “Tei” of aristocracy residences in Heian and Kamakura periods, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 86 No. 779, pp. 259-268, 2021. 1 (in Japanese)
劉羽虹：平安・鎌倉時代貴族住宅の末尾語「亭」について，日本建築学会計画系論文集，第 86 巻，779 号，pp. 259-268, 2021. 1
- 5) Hoshi, Y. et al.: A research on the name of aristocratic residences written in their diary, Architectural Institute of Japan Tohoku Branch, Vol. 69, pp. 153-156, 2006. 6 (in Japanese)
星陽介ほか：貴族日記にみる住宅の呼称に関する研究，日本建築学会東北支部，第 69 号，pp. 153-156, 2006. 6
- 6) Miyata, M. et al.: A research on the name of aristocratic residences written in Gyokuyou, Architectural Institute of Japan Tohoku Branch, Vol. 68, pp. 183-186, 2005. 6 (in Japanese)
宮田充ほか：『玉葉』における貴族住宅の呼称に関する研究，日本建築学会東北支部，第 68 号，pp. 183-186, 2005. 6
- 7) Kuroita, K. and Kokushi Taikei Edition: Kokushi Taikei Kugyo Bunin 1.2 (Directory of Court Nobles) Yoshikawa Kobunkan, 1971 (in Japanese)
黒板勝美，国史大系編修会：国史大系公卿補任 1、2 篇，吉川弘文館，1971
- 8) Ota, S.: Research of Shinden-zukuri, Yoshikawa Kobunkan, 1987 (in Japanese)
太田静六：寝殿造の研究，吉川弘文館，1987
- 9) Kyoto City Archaeological Research Institute: Heiankyo sakyo nijo nibo jyucho ato (kayanojin), 2005 (in Japanese)
京都市埋蔵文化財研究所編：平安京京東二条二坊十町（高陽院）跡，2005
- 10) Institute of Paleological Studies: Heiankyo Teiyo, Kadokawa shoten,

- 1994 (in Japanese)
古代学研究所編集：平安京提要，角川書店，1994
- 11) Kyoto City Archaeological Research Institute: Heiankyo sakyo sanjo nibo jyucho (Horikawain) ato, 2007 (in Japanese)
京都市埋蔵文化財研究所編：平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡，2007
- 12) Ota, H.: Nihon kenchikushijosetsu, Shokokusha Publishing Co.,Ltd, 2009 (in Japanese)
太田博太郎：日本建築史序説 増補第三版，彰国社，2009
- 13) Morohasi, T.: Dai Kanwa Jiten, Taishukan Publisher. 1994-2000 (in Japanese)
諸橋轍次：大漢和辞典（修訂版），大修館書店，1994-2000

注

- 注1) 各日記は以下の刊本による。大日本古記録：『小右記』『中右記』『後二条師通記』『殿暦』『愚昧記』『猪隈関白記』『岡屋関白記』『民経記』『玉葉』、史料纂集：『台記』『勘仲記』、増補史料大成：『権記』『春記』『水左記』『帥記』『兵範記』『山槐記』、『明月記（全3巻）』国書刊行会、今川文雄校訂『玉藻』思文閣出版、図書寮叢刊『仙洞御移徙部類記 上・下』明治書院。またあわせて下記を参照した。増補史料大成：『小右記』『中右記』『台記』『勘仲記』、国書及書刊行会編『玉葉（全3巻）』名著刊行会。さらに末尾語「亭」「第」の事例抽出に、東京大学史料編纂所および国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館の公開データベースを活用した。なお本稿の注記における史料引用文中の〈 〉は割注を示す。
- 注2) ただし「左府亭」は、『玉藻』建暦元年（1211）3月4日条に記される、『小右記』長保元年（999）2月9日条からの抄出による。大日本古記録『小右記 11 小右記逸文 附載』の「小右記逸文」長保元年2月にも収載。
- 注3) 「関白書亭」は万寿2年（1025）3月18日条の「又関白書亭令会儒士作文云、」、「書亭」は万寿4年（1027）6月2日条の「今曉女院渡給関白第、〈書亭、〉」である。いずれも関白邸内の建物の可能性がある。
- 注4) 藤原資頼は小野宮実資の養子で、阿波権守、彈正少弼、伯耆守、刑部少輔を歴任、『尊卑分脈』に正四位下とある。
- 注5) たとえば藤原頼通の「関白亭」は高陽院で、広大な池跡を検出（参考文献8）。源頼房（1037-1094）の「六條亭」は左京六条三坊五町に所在し、邸内に名泉が湧き出し、「六条池亭」とも呼ばれていた（参考文献9）。藤原教家（1033-1090）の「教家朝臣六條亭」が所在した左京六条三坊十二町付近の地下は、発掘調査によれば平安時代から江戸時代まで湧水層にあたるという（参考文献9）。藤原師実の「堀河亭」は左京三条二坊九・十町に所在し、白河天皇の里内裏時に池の存在が知られる（参考文献10）。藤原実季の「七条亭」は左京七条三坊十二町にあって、「七条水閣」とも呼ばれていた（参考文献9）。そのほか藤原師通の「二条亭」、「高松亭」、「修理大夫俊綱朝臣臥見亭」にも「水」の存在が知られる。
- 注6) 元永元年（1118）12月15日条「京御所三条烏丸亭」、大治2年（1127）1月14日条「三条烏丸第」。
- 注7) 源基綱（従三位）の「左大弁雖来亭」、源雅実（正二位、従一位）の「内大臣亭」「土御門亭」「内府土御門亭」、藤原長実（正四位下）の「八条亭」、藤原忠長（正四位下）の「阿波守三条亭」、藤原基隆（正四位下）の「大宮亭」「磨守基隆朝臣大宮亭」「基隆三条亭」など。
- 注8) 藤原頼長（正二位、従一位）の「左府亭」「左府御亭」「左府御分学生亭」「東三条亭」、源雅定（正二位）の「右府中院亭」「定右府御亭」「中院亭」「右府亭」「定亭」、藤原実能（正二位）の「内府亭」「三条西洞院内府亭」、藤原宗能（正二位）の「権大納言亭」「上卿大納言宗能卿亭」、藤原実行（従一位）の「太政大臣亭」「太政大臣三條高倉亭」「太相国御亭」、大江維順（正四位下）の「大学頭亭」、藤原実綱（正四位下）の「式部大輔実綱朝臣亭」、藤原正家（正四位下）の「大輔正家亭」、藤原宗輔（正二位）の「民部卿亭」、藤原基実（正二位）の「内府亭」、源定房（正四位下）の「春宮亮亭」、藤原公教（正二位）の「内府亭」「高倉内府亭」、藤原伊通（正二位）の「左府亭」、藤原頼長（正四位下、正三位）の「頭中宮亮三条西洞院亭」「八条堀川前中納言亭」、藤原重通（正二位）の「按察使亭」、藤原成頼（従三位）の「成頼卿土御門亭」、平清盛（正二位、従一位）の「六波羅亭」「内府六波羅亭」「内府亭」「前太相国亭」「六波羅入道亭」、藤原邦綱（正三位）の「東三条亭」「土御門東洞院春宮権大夫亭」、藤原経宗（正二位）の「左府亭」「左大臣亭」、藤原忠雅（正二位、従一位）の「内府亭」「華山院太相国亭」「太政大臣亭」、藤

- 原師長（正二位）の「藤大納言亭」「檢校藤大納言亭」「檢校大納言亭」「左大将亭」「檢校左大将亭」、源雅通（正二位）の「源大納言亭」「内府亭」、藤原基房（従一位）の「摂政亭」、平重盛（従二位）の「春宮大夫亭」「六波羅前大納言亭」、藤原兼実（正二位）の「四条坊門東洞院右府亭」「六角東洞院亭」「六角東洞院右府亭」「右府亭」、藤原実定（正二位）の「皇后宮大夫亭」、藤原宗家（正三位）の「中御門西洞院権中納言泉亭」、平時忠（正三位）の「長官権中納言右衛門督平朝臣亭」など。
- 注9) 藤原公能（正三位）の「権中納言公能第」、藤原頼長（正二位）の「宇治小松第」、藤原忠通（従一位）の「摂政第」「摂政近衛第」「太政大臣第」、高階仲行（従五位上）の「仲行六条万里小路第」、藤原実能（正二位）の「右大将第」「右大将大炊第」「内大臣三條西洞院第」、藤原実行（正二位、従一位）の「右大臣三條高倉第」「太相国第」、藤原隆季（正四位下）の「左馬頭隆季朝臣室町第」、源雅定（正二位）の「右大臣第」「右大臣六條室町第」「右大臣六條鳥丸第」、源成雅（正四位下）の「大相公三條第」など。
- 注10) 藤原忠通の邸について、康治元年（1142）正月16日条、同年7月6日条、康治2年（1143）3月9日条、天養2年（1145）4月21日条に「摂政亭」。康治元年（1142）2月5日条に「摂政里第」。久安2年（1146）12月16日条、久安3年（1147）3月27日条、久安4年（1148）10月8日条、久安6年（1150）2月12日条に「摂政第」。久安3年（1147）3月20日条に「摂政近衛亭」。久安4年（1148）6月26日条に「摂政近衛第」。久安4年（1148）8月9日条「近衛亭」。同年10月8日条「近衛第」。また源雅定の邸について、仁平元年（1151）11月11日条に「右大臣第」、仁平3年（1153）正月7日条に「右大臣亭」。
- 注11) 平清盛の邸は「八條亭」「六波羅亭」「入道大相国八條亭」「八條坊門櫛笥二品亭」。また清盛が信任した藤原邦綱の邸は「大納言邦綱卿亭」「土御門亭」「五條亭」。さらに清盛の異母弟、平頼盛の邸は「右衛門督頼盛卿之亭」で、清盛の三男宗盛の邸は「右大将亭」「八條北高倉新亭」。そして清盛の継室時子の同母弟、平時忠の邸は「大理亭」など。
- 注12) 参考文献4。
- 注13) 平重衡（正四位下）の「左馬頭重衡朝臣八条亭」、藤原経宗（従一位）の「左大臣亭」、平清盛（従一位）の「八条亭」「入道相府八条亭」、藤原基房（従一位）の「関白亭」、藤原邦綱（正二位）の「正親町東洞院亭」「五条東洞院亭」、藤原隆季（正二位）の「別当亭」、平頼盛（正二位）の「頼盛卿八条亭」、藤原基通（従一位）の「摂政八条亭」「八条亭」「五条東洞院摂政亭」、藤原定能（正三位）の「藤中納言定能卿樋口大宮亭」、源頼朝（正四位下）の「五条亭」、藤原経宗（従一位）の「左大臣大炊御門亭」「左大臣亭」「左府亭」「左大臣大炊御門富小路亭」、藤原頼輔（従三位）の「頼輔入道雲林院亭」、藤原隆房（従三位）の「冷泉万里小路亭」「冷泉亭」、藤原経房（正三位）の「経房卿亭」「一上亭」「上卿経房卿亭」、藤原光長（従四位上）の「光長朝臣亭」、藤原実房（正二位）の「上卿右大将亭」「左大臣亭」、藤原実定（正二位）の「右府亭」「右大臣亭」、藤原能保（正三位）の「一条室町亭」、藤原兼雅（正二位）の「右大臣亭」など。
- 注14) 藤原邦綱（正四位下、正二位）の「邦綱卿正親町第」「五条第」、平清盛（従一位）の「六波羅第」、藤原基房（従一位）の「摂政第」「関白第」、平重盛（正二位）の「故内大臣六波羅第」「重盛卿六波羅第」、源通雅（正二位）の「内府第」、藤原定能（従五位下）の「六条坊門大宮第」、平時忠（従二位）の「時忠卿佐女牛東洞院第」、藤原経宗（従一位）の「左大臣第」「左府第」、平頼盛（正二位）の「頼盛卿六波羅第」、平重盛（正二位）の「故内大臣六波羅第」、藤原成親（正三位）の「成親卿五辻第」、藤原基通（従一位）の「博陸第」「摂政第」「五条東洞院第」、源経信（従四位上）の「経信卿第」、藤原経房（正三位）の「経房卿第」、藤原忠親（正二位）の「内大臣第」など。
- 注15) 「大宮亭」と「大宮第」、「左大臣亭」と「左大臣第」、「土御門亭」と「土御門第」、「八條亭」と「八條第」、「関白亭」と「関白第」、「五條東洞院亭」と「五條東洞院第」、「摂政亭」と「摂政第」、「閑院亭」と「閑院第」、「大炊亭」と「大炊第」など。なお、これについては宮田氏らが指摘している（参考文献5）。
- 注16) 藤原公光（従二位）の「前左衛門督亭」、藤原基実（正二位）の「摂政亭」、藤原基房（正二位）の「摂政亭」、藤原経宗（正二位）の「右府亭」「左府亭」「左相府亭」「頭権大夫能朝臣来向亭」、藤原光隆（正三位）の「治部卿亭」、藤原隆季（正三位）の「左金吾亭」、平清盛（従一位）の「太相国六波羅亭」、藤原邦綱（正二位）の「邦綱六条亭」、高階経仲（従四位上）の「経仲亭」。
- 注17) 藤原兼雅（正二位）の「右府五条亭」、源通親（正二位）の「左金吾中

院亭」、平頼盛（正二位）の「室町亭」、藤原定能（正二位）の「樋口大宮大納言亭」、藤原基通（従一位）の「博陸亭」。

注18) 源通親（正二位）の「内府亭」「土御門内府亭」、藤原信清（従二位）の「右衛門督亭」、藤原頼実（従一位）の「前太相国大炊御門亭」「前太政大臣亭」、源通光（正二位）の「左衛門督久我亭」、源定通（正二位）の「土御門中納言亭」、藤原実氏（正二位）の「右大将亭」「右大将冷泉亭」「内府亭」、藤原家実（従一位）の「大相国亭」、藤原公継（従一位）の「左府亭」、藤原家嗣（正二位）の「右大将亭」、藤原良通（正二位）の「冷泉亭」など。

注19) 範子内親王の「前斎院大炊御門第」「前斎院五辻第」、藤原殖子の「七条院三条烏丸第」「七条院七条第」、観子内親王の「六條第」「宣陽門院六條第」「大町宣陽門院第」「正親町宣陽門院第」、亮子内親王の「殷富門院仁和寺第」「殷富門院安井第」、暲子内親王の「八条院八条第」、藤原任子の「宜秋門院京極第」、礼子内親王の「四条壬生嘉陽門院第」など。

注20) 藤原兼雅（正二位）の「右大臣里第」、源通親（正二位）の「内府第」「内大臣中院第」、藤原基房（従一位）の「松殿禪門菩提院第」、藤原隆忠（正二位）の「内大臣第」「中御門油小路内大臣第」「左大臣第」、藤原頼実（従一位）の「前太相国大炊御門第」「前太政大臣四条坊城第」、藤原良経（従一位）の「故摂政中御門第」。

注21) 『猪隈閑白記』建暦元年（1211）1月28日条「今夜天皇自大内行幸於前太相国大炊御門第、可為皇居也、」、『明月記』元久2年（1205）3月27日条「上皇・殷富院・仁和寺宮、渡御前太相国大炊御門亭、」。

注22) 藤原能季（正四位下）の「能季朝臣中御門亭」、藤原隆忠（従一位）の「左府亭」、藤原資頼（従三位）の「資頼朝臣亭」、藤原定高（従三位）の「二条中納言定高卿深草亭」、藤原良平（正二位）の「左府亭広橋亭」、西園寺公経（従一位）の「太政大臣今出川亭」「入道相国亭」「今出川亭」「入道相国今出川新亭」、藤原兼経（従一位）の「左府亭」「摂政亭」「近衛亭」、近衛家実（従一位）の「前博陸亭」「前閑白亭」、藤原行能（従三位）の「行能卿里亭」、藤原良実（従一位）の「右大臣亭」、藤原親季（正四位下）の「親季朝臣亭」、四条隆親（正二位）の「帥亭」「四条大納言亭」など。

注23) 藤原公継（正二位）の「内大臣第」、藤原能季（従三位）の「能季卿中御門第」、藤原公経（正二位）の「右大将勘解由小路第」、源雅実（正二位）の「内大臣土御門第」、藤原家成（従三位）の「権大夫家成三条第」、近衛家実（従一位）の「博陸第」「猪熊第」、西園寺公経（従一位）の「太政大臣入道今出川第」、藤原教実（従一位）の「摂政第」、藤原兼経（従一位）の「左府第」「摂政第」など。

注24) 藤原能季の「能季朝臣中御門亭」「能季朝臣中御門第」、西園寺公経の「太政大臣今出川亭」「太政大臣入道今出川第」、近衛兼経の「左府亭」「左府第」や、近衛家実の「猪熊亭」「猪熊第」。

注25) 菅在高（正三位）の「在高卿上東門亭」、藤原公継（従一位）の「左大臣三条亭」、藤原教実（正二位）の「一条亭」、北条泰時の「武州亭」、藤原兼平（正二位）の「右府亭」、藤原実基（正二位）の「冷泉万里小路亭」、源顕平（正二位）の「顕平卿春日万里小路亭」、源具実（正二位）の「入道内大臣泉亭」、藤原隆親（正二位）の「隆親卿四条亭」、平時高（従三位）の「時高卿安居院亭」など。

注26) 藤原家実（従一位）の「大閤土御門第」、藤原実氏（正二位、従一位）の「内大臣冷泉富小路第」「冷泉第」「太政大臣冷泉第」「前相国冷泉第」「大相一条北辺第」、藤原親俊（従二位）の「親俊卿四条第」、源顕平（正二位）の「顕平卿春日万里小路第」、藤原兼平（従一位）の「左大臣第」、藤原公経（従一位）の「一条入道太相国第」、藤原隆親（正二位）の「四条大納言第」など。

注27) 源顕平の「顕平卿春日万里小路亭」「顕平卿春日万里小路第」、藤原（四条）隆親の「隆親卿四条亭」「四条大納言第」や、西園寺実氏の「冷泉亭」「冷泉第」。

注28) 藤原師経（正二位）の「右府亭」、藤原基家（正二位）の「五辻大宮亭」「九条巫相亭」、近衛家実（従一位）の「土御門堀川閑白殿御亭」「閑白殿御亭」「土御門閑白殿御亭」「土御門堀川御亭」、藤原（滋野井）実宣（正二位）の「前大納言実宣卿亭」、藤原家時（従三位）の「三位家時卿」、藤原家信（従三位）の「三位家時卿」、源兼時（正四位下）の「入道修理権大夫兼時朝臣亭」、藤原道家（正二位）の「一条室町閑白亭」「一条町亭」「閑白亭」、西園寺実氏（正二位、従一位）の「右大将亭」「内府冷泉亭」「冷泉富小路内大臣亭」「内相国亭」「内府亭」「内大臣亭」「冷泉富小路嚴親相府亭」「冷泉富小路相府亭」「前相国亭」、藤原頼房（従三位）の「綾小路堀川三位入道頼房卿亭」「綾小路堀川亭」、源具実（従二位、正二位）の「左衛門督具実卿亭」「堀川大納言亭」、藤原

（日野）家光（従三位）の「左大弁家光卿亭」、平範輔（従三位）の「右大弁範輔亭」、藤原氏通（従四位下）の「大炊御門堀川少将氏通亭」、藤原家衡（正三位）の「六條三位入道家衡卿亭」、藤原隆親（従二位）の「四条納言冷泉亭」「万里小路亭」「四条大納言冷泉万里小路亭」「中宮大夫亭」、藤原教実（正二位）の「閑白亭」「今出川亭」、三条公房（従一位）の「二条油小路浄土寺相国亭」「二条油小路亭」、西園寺公経（従一位）の「今出川相国禪門亭」「相国禪門亭」「今出川大相国亭」「今出川亭」「入道太政大臣亭」「今出川入道相国亭」「入道太相国亭」、藤原家嗣（正二位）の「右大将亭」、藤原実親（従一位）の「三条前右府亭」「前右府亭」、平經高（正二位）の「民部卿亭」、藤原（徳大寺）実基（正二位）の「右大将徳大寺亭」、菅原淳高（従二位）の「刑部卿亭」、藤原兼平（正二位）の「一上亭」、藤原道良（従一位）の「二条富小路亭」、藤原（西園寺）公相（従一位）の「一上亭」、藤原家良（正二位）の「衣笠前内府亭」、源資定（正四位下）の「源相公亭」、藤原（花山院）定雅（正二位）の「花山入道右府栗田口亭」など。

注29) 藤原実氏（正二位）の「内大臣第」、藤原隆親（正二位）の「冷泉万里小路亭」「兵部卿鷺尾第」、西園寺実氏（従一位）の「太相国富小路第」「吹田第」、藤原実親（従一位）の「三条入道右府第」、藤原実経（従一位）の「一条室町閑白殿里第」、藤原通雅（正二位）の「右大将第」、藤原公孝（正四位下）の「新大理第」、藤原資宣（正五位上）の「右中丞第」「頭弁第」、藤原実尚（正二位）の「八条納言第」、源具実（正二位）の「堀川内府入道第」、藤原基平（従一位）の「左府第」、藤原公孝（従三位）の「大理第」。

注30) 藤原隆親の「冷泉万里小路第」「冷泉万里小路第」や、西園寺実氏の「外祖太相国富小路第」「冷泉富小路外祖前太相国亭」。

注31) 源親時の「親時第」、藤原（世尊寺）経朝（正三位）の「三品第」「勘解由小路三位第」「白川三品第」、源基具（正二位）の「堀川大納言第」、藤原（日野）資宣（正三位、正二位）の「藤中納言第」「前藤中納言第」「民部卿第」、藤原（吉田）経長（正四位下、正三位、従二位）の「吉田第」「吉田中納言第」「吉田黄門第」「頭弁吉田第」、近衛家基（正二位）の「内大臣殿御第」、源（中院）通成（正二位）の「内府禪門第」「三条坊門万里小路内府禪門第」、菅原在匡（従四位上）の「刑部卿第」、広橋兼頼（正四位下）の「頭弁殿第」、藤原（西園寺）実兼（正二位）の「春宮大夫第」「西園寺大納言第」「春宮大夫西園寺第」、源（中院）通頼（正二位）の「土御門源大納言第」、藤原（坊城）俊定（正五位下）の「吉田俊定第」、源資平（正二位）の「前源中納言第」「按察第」「按察卿第」、藤原（広橋）兼頼（正四位下）の「貫首大丞第」、藤原経持の「経持第」、吉田経長（正三位）の「左大弁宰相河東第」、藤原（花山院）定雅（正二位）の「栗田口禪閣第」、藤原（中御門）経任（正二位）の「中御門巫相第」「帥卿第」「都督第」、藤原（大炊御門）信嗣（正二位）の「大炊御門大納言第」、藤原公為（従三位）の「一条三位入道第」、藤原（松殿）隆行（正二位）の「四条前中納言隆行卿春日万里小路第」、源（中院）通成（正二位）の「三条坊門内府禪門第」、高経茂（従四位下、従三位）の「一条小河第」「経茂卿第」、藤原（二条）師忠（従一位）の「万里小路第」、源（堀川）基具（従一位）の「儀同三司基具公第」「儀同三司堀川第」「一品堀川第」「儀同三司第」「一品第」、平信輔（正五位上）の「信輔朝臣第」、藤原（花山院）長雅（正二位）の「花山院大納言第」、源（土御門）定実（正二位）の「土御門大納言第」、藤原（葉室）頼親（正二位）の「按察卿第」、四条隆親（正二位）の「大納言隆親卿四條第」、藤原（三条）実重（正二位）の「前右大将第」、薄衣清堅（従六位上）の「清堅朝臣第」など。

注32) 平時継（正二位）の「深草前平納言亭」、源具房（正二位）の「中院黄門亭」「中院中納言亭」、藤原（五辻）経氏（正四位下）の「頭中將経氏朝臣亭」、藤原（吉田）経長（正二位）の「吉田亭」、西園寺実兼（正二位）の「春宮大夫亭」、皇居の「四條亭」「安居院公遠朝臣亭」。

注33) 『中右記』元永元年（1118）正月20日条に「此御所依無前池」とあるように、「三条烏丸亭」に「前池」は不在である。また『兵範記』仁安2年（1167）5月17日条に「土御門東洞院春宮権大夫亭」と記される藤原邦綱の邸について、『台記別記』久安3年（1147）3月27日条は「土御門北、東洞院東、無池山」とある。

注34) 参考文献8のpp.644－645、参考文献12のpp.98、pp.139－140。

注35) 参考文献13。

ON THE LAST WORD “TEI” OF HEIAN AND KAMAKURA PERIOD ARISTOCRACY RESIDENCE IN THE NOBLE DIARY

Yuhong LIU^{*1}, *Masaya FUJITA*^{*2}

^{*1} Grad. Student, Graduate School of Science and Engineering, Kansai University, M.A.

^{*2} Prof., Kansai University, Dr.Eng.

The purpose of this research is to clarify the actual condition of the last word “Tei” (亭) of the residence name that can be seen in the noble diaries from Heian to the early Kamakura period in Japan. In this paper, in addition to the noble diaries featured by Hoshi et al., “Suisaki” “Sankaiki” “Gumaiki” “Kanchuki” and “Sentogoishiburuiki” are newly considered. It is also necessary to compare “Tei” (亭) with “Tei” (第).

Summarize the following research results.

- ① In the 10th and 11th centuries, I reaffirmed Hoshi et al.’s claim that “Tei” (亭) are few and “Tei” (第) is heavily used. Also, “Tei” (第) was said to be used for the residence of high-ranking nobles, but according to “Shoyuki”, it was also applicable to “Tei” (亭).
- ② Hoshi et al. claimed that “Tei” (亭) was heavily used from the middle of the 11th century, this was confirmed in this paper. Furthermore, As seen from the cases of residences “Tei” (亭), the court rank of residents was widely as “Tei” (第).
- ③ The around 1100, namely from the latter half of the 11th century to the first half of the 12th century, it was a transitional period from the last word “Tei” (第) to “Tei” (亭) of residences, Since then, “Tei” (亭) was used more often than “Tei” (第).
- ④ In the 12th century, “Tei” (亭) was supposed to be dominant, but in “Daiki” and “Gyokuyo”, “Tei” (第) is also used. And there was a difference in the tendency depending on the diaries.
- ⑤ In the 13th century, either “Tei” (亭) or “Tei” (第) was not dominant, but both were used in the same way.
- ⑥ In “Gonijomromichiki” “Chuyuki” “Denryaku” “Sankaiki” and “Gyokuyo”, the owner’s residence uses more “Tei” (亭) than “Tei” (第), or only “Tei” (亭) was used. Specially “Gyokuyo”, that was thought to have used “Tei” (亭) selectively.

In the 13th century, it is unusual for sticking use “Tei” (第) and not use “Tei” (亭) at all in “Inokumakanpakuki”. “Kanchuki” has the same tendency. May be influenced by the personality and writing habits of the writer. It is necessary to conduct detailed verification and analysis around “Tei” (亭) “Tei” (第) or the other residence words, and further expanding the times.

(2020 年 10 月 8 日原稿受理, 2021 年 1 月 18 日採用決定)